『ニシュパンナヨーガーヴァリー』 「悪趣清浄マンドラ」の問題点

立 川 武 蔵

1. テキストと問題点

11～12 世紀のインド後期密教のマンドラ集『ニシュパンナヨーガーヴァリー』（完成せるヨーガの環, NPY）のテキストとしては、従来、B. Bhattacharyya (Bh) の校訂本と Yong-Hyun Lee (Lee) の校訂本が用いられてきた。なおこの文献の写本は完本でないものを含めて二十数点が存在することが知られている¹⁾。諸章の翻訳もなされている²⁾。

NPY 第 22 章「悪趣清浄マンドラ」では、中尊シャーキャシンハを取り巻く金剛仏頂から金剛鈴までを擁する宮殿があり、その宮殿の周縁に五十五の尊格が並ぶ。これらの五十五尊は『初会金剛頂経』「降三世品」の中、特に「五類諸天の灌頂」の節に登場する諸尊を踏まえている（堀内寛仁『梵蔵漢対照・初会金剛頂経の研究・梵本校訂篇（上）』密教文化研究所、1973 年、355-367 頁）参照）。また『タントラ部集成』（*rGyud sde kun btus*, GDK）23 番「降三世千三十七尊マンドラ」の外院の諸尊（38～58）および四隅の女神（59～62）と関係する [Tachikawa et al. 1991: 32-33]。

後述するように、写本 D₁ および H によればこのマンドラの外縁に二十八の月輪が配されていると解釈できる。その場合、それらの月輪には北東のニーラカンタをはじめとして、右回りに五十五尊が並ぶ。二十八の月輪に五十五尊が並ぶとすれば、ほとんどの月輪に男神と女神とが組になって入ることになる。先述の『タントラ部集成』23 番においては、上述の五十五尊のうちの多くが合体したかたち（ヤブユム）で描かれている [bSod nams rgya mtsho and Tachikawa 1989: 23]。

しかし、かの五十五尊の最後の四人（ビーマー、シュリー、サラスヴァティー、ドゥルガー）、すなわち降三世マンドラでは四隅に配される女神たちは、元来、ヒンドゥー教の女神である。二十八の部屋の中に五十五尊のすべてを配するためには、彼女たちは部屋を共有しなければならない。ヒンドゥー教的伝統にあってそ

(120) 『ニシュパナヨーガーヴァリー』「悪趣清浄マンダラ」の問題点 (立 川)

れはまずあり得ない。

外縁の五十五尊が二十八の「部屋」にではなく、五十五の「部屋」にそれぞれ入っていれば、ヒンドゥー女神たちが「部屋」を共有することは考えなくともよい。しかし、その場合にはテキストの「二十八」をどのように解釈すればよいのであろうか。

NPY 第 22 章では五十五尊が並ぶ円輪 (チャクラ・ヴァータ) の外に地獄・餓鬼・動物などの「趣」が示されるが、これらの「趣」の位置は、かの二十八の部屋の位置をどのように考えるかによって異なってくる。

2. 『ニシュパナヨーガーヴァリー』「悪趣清浄マンダラ」の中心部

図 1 は NPY 悪趣清浄マンダラの諸尊の配置図である。

図 1 悪趣清浄マンダラの諸尊の配置図

図 1 では男尊とその妃のペアに一つの番号が付せられている。しかし、64 の二尊 (ビーマーとシュリー) と 65 の二尊 (サラスヴァティーとドゥルガー) は男尊とその妃という意味のペアではない。以下、NPY 第 22 章に従ってマンダラの構造と諸尊を簡単に説明しておきたい。このマンダラの諸尊に関するテキストの訳は、拙著『マンダラ観想と密教思想』(春秋社、2014 年秋刊行予定) に発表予定であり、ここでは問題点を示すために必要な部分の訳を示しておきたい。

楼阁と中尊

悪趣清浄マンダラにあっては、金剛籠の内に風、火、水、地および須弥山の上に楼阁があり、その中の「内マンダラ」(アビヤンタラ・マンダラ) の中に青い金剛の環で囲まれた黄色の八輻輪がある。…輪の中心にある二重蓮華の上に…シャーキャシンハ (1)

『ニシュパンナヨーガーヴァリー』「悪趣清浄マンダラ」の問題点（立 川）（121）

がおり….

四方に仏頂が配される。すなわち、東輻には金剛仏頂（2）、南輻には宝仏頂（3）、西輻には蓮華仏頂（4）、北輻には一切仏頂（5）がいる。四維にも仏頂が配される。東南輻には光仏頂（6）、南西輻には幢仏頂（7）、西北輻には利仏頂（8）、北東輻には傘仏頂（9）がいる。

金剛の環の外側において東南等の隅に嬉女（10）、鬘女（11）、歌女（12）、舞女（13）の四女神がいる。

四つの回廊（パッティ）においては〔それぞれの〕門の〔中尊から向かって〕左に二人の菩薩が、右に二人の菩薩がいる。東廊に弥勒（14）、不空見（15）、滅悪趣（16）、除憂闇（17）がいる。南〔廊〕に香象（18）、大精進（19）、虚空庫（20）、智幢（21）がいる。西〔廊〕に無量光（22）、月光（23）、賢護（24）、光網（25）がいる。北〔廊〕に金剛藏（26）、無尽慧（意）（27）、弁積（28）、普賢（29）がいる。

マンダラの東南等〔の隅〕に華女（30）、香女（31）、灯女（32）、塗女（33）がいる。東門に金剛鉤（34）、南門に金剛索（35）、西門に金剛鎖（36）、北門に金剛鈴（ヴァジュラ・アーヴェーシャ）（37）がいる。

これら三十七尊はきらびやかな衣と宝石を有し、宝冠を被り、二眼、二臂で、二重蓮華の上の月輪に薩埵坐で坐っている。（Bh, pp. 66-67）

3. 『ニシュパンナヨーガーヴァリー』「悪趣清浄マンダラ」の外縁

次に、族主が説明され、その後、外マンダラの五十五尊の説明がなされる。

Bh (68,1-2) には次のようにある。

iha bāhyakoṇasthamaṇḍalasya devatāsthāne paṭṭikāyām aṣṭaviṃśaticandramaṇḍalāni paśyati/
tantrāntarādiṣu ṣoḍaśabodhisattvanyāso na saṅgataḥ/

ここでは外の領域にあるマンダラの中の諸尊の代わりに（あるいは、場である）回廊に二十八の月輪を見る。他のタントラ等において諸菩薩を配置するのは正しくない

下線を引いた部分の意味がはっきりしない。

写本 G (54b,5-6) と E (56a,1-2) には次のようにある。

iha bāhyakoṇasthaḥ maṇḍalasya devatāsthānapaṭṭikāyām aṣṭaviṃśaticandramaṇḍalāni paśyed iti
tantrokter vedīṣu .../

ここでは外の領域に立つ者は、マンダラの中の諸尊の場である回廊（パッティカー）に二十八の月輪を見るべきである、とタントラにあるので、もろもろのヴェランダ（ヴェーディー）において云々。

ここに引用されたタントラ経典の箇所が現在のところ不明であるゆえに、明確な判断はできないが、Bh の読みよりは意味が明白である。ただここにいうヴェーディーが何を指すのか明白ではない。

(122) 『ニシュパンナヨーガーヴァリー』「悪趣清浄マンダラ」の問題点 (立 川)

D₁ (72a,1), H (60b,4) には次のようにある。

iha bāhyamaṇḍalasya devatāsthānapaṭṭikāyām aṣṭaviṃśaticandramaṇḍalāni paśyed iti tantrokter bodhi.../

ここでは外のマンダラの中の諸尊の場である回廊に二十八の月輪を見るべきである、とタントラにあるので、菩薩云々。

T (62b,3) には paśyyati tantrokter vedīṣu とある以外は D₁ および H と同じであるが、T の場合、E と G と同様、ヴェーデーが何を指すのかははっきりしない。

チベット訳 (P2,TTP (北京版), no.5032, vol.87, p.68, f.5, f.1-2: 'dir phyi rol gyi dal gyi lha'i gnas kyi snam bu la zla ba'i dal nyi shu rtsa brgyad blta'o zhes rgyud la gsungs pa'i phyir snam bu rnams la) には、「ここでは外の領域の中の諸尊の場である回廊に二十八の月輪を見るべきである、とタントラにいわれているので、回廊に云々」とあり、D₁, H および T にほぼ一致する。この箇所は D₁, H および T に従って理解したい。したがって、外縁つまり「外マンダラ」には二十八の月輪があるという解釈を採りたい。「月輪」とは尊格の座を指している。すべての尊格は月輪あるいは日輪を座としているのである。テキストは続いて次のようにいう。

ある者たちは「外マンダラ」というタントラの語に基づいて「外側の楼閣の中に第二の楼閣がある」という。

ある者たちは「大日 (マハーヴァイローチャナ) たちと九人の如来は仏頂を有し、比丘の衣をまとう」という。

蓮華輪に囲まれた円輪 (チャクラヴァータ) の内側に北東の方面からはじめて右まわりにニーラカンタ (青頸) 等が配される。(Bh, p. 68)

蓮華輪に囲まれた円輪の内側に北東の方角からはじめて右まわりにニーラカンタ (青頸, シヴァ) 等が配される。以下、それらの諸尊についてのテキスト部分を略して挙げておく。

ヒンドゥー教の神々

これらのうち、北東には牛に乗るニーラカンタ (38) がいる。ガルダの上にヴィシュヌ (39) がいる。ヴァジュラヘーマー (39b, b は妃を意味する) はヴィシュヌに似ているが、黄金色であることが違いである。クジャクの上にヴァジュラガンタ (クマール) (40) がいる。カウマリー (40b) はヴァジュラガンタに似る。野鴨 (ハンサ) の上にマウナヴァジュラ (ブラフマー) (41) がいる。ヴァジュラシャーンティ (41b) はブラフマーに似る。白い六牙を有する象王の上にヴァジュラーユダ (金剛を武器とするもの、インドラ) (42) がいる。女神ヴァジュラムシュティ (42b) はヴァジュラーユダに似る。

九曜および他の諸尊

七頭立ての馬車の上にヴァジュラクンダリン (太陽) (43) がいる。ヴァジュラームリ

『ニシュパンナヨーガーヴァリー』「悪趣清浄マンダラ」の問題点（立 川）（123）

ター（43b）はヴァジュラクンダリンに似る。野鴨（ハンサ）の上にヴァジュラプラバ（月）（44）がいる。ヴァジュラカーンティ（44b）はヴァジュラプラバに似る。山羊の上にヴァジュラピンガラ（火星）（45）がいる。ヴァジュラメーカー（45b）はヴァジュラピンガラに似る。蓮華の上にヴァジュラサウムヤ（水星）（46）がいる。ヴァジュラサウムヤ（46b）はヴァジュラサウムヤに似る。蛙の上にヴァジュラグル（木星）（47）がいる。グルヴァジュラー（47b）はヴァジュラグルに似る。蓮華の上にヴァジュラシュクラ（金星）（48）がいる。シュクラヴァジュラー（48b）はシュクラヴァジュラに似る。亀の上にヴァジュラダンダ（土星）（49）がいる。ダンダヴァジュラーグリー（49b）はダンダヴァジュラに似る。ヴァジュララーフ（ラーフ）（50）は日輪と月輪を右と左の手に持つ。ヴァジュラースリー（50b）はヴァジュララーフに似る。ヴァジュラケートゥ（ケートゥ）（51）は、青黒で剣と索としての蛇を持つ。ヴァジュラーナーギー（51b）はヴァジュラケートゥに似る。

これらの四組（48～51）とヴァジュラサウムヤ以降の六組（46～51）とを他のタントラに述べられているようにここで〔合わせて〕述べた。

象の上にヴァジュラシャウンダ（マドゥマッタ）（52）がいる。ヴァジュラヴィナヤー（52b）はヴァジュラシャウンダに似る。コーキラ鳥が曳く車の上にヴァジュラマーラ（マドゥカラ）（53）がいる。ヴァジュラーサナー（53b）はヴァジュラマーラに似る。オウム（C82a, 7 による）がひく車の上にヴァジュラヴァシー（E, G, H による）（ジャヤ）（54）がいる。ヴァジュラヴァサー（E, G, H による）（54b）はヴァジュラヴァンシャに似る。蛙の上にヴィジャヤヴァジュラ（ジャヤーヴァハ）（55）がいる。ヴァジュラセナー（55b）はヴィジャヤヴァジュラに似る。花の集まりの上にヴァジュラムサヤ（56）がいる。ヴァジュラドゥーティー（56b）はヴァジュラムサラに似る。雌山羊の上にヴァジュラーナラ（火神）（57）がいる。ヴァジュラジュヴァーラー（57b）はヴァジュラーナラに似る。

水牛の上ヴァジュラカーラ（ヤマ）（58）がいる。ゾンビ（ヴェーターラ）の上にヴァジュラカーリー（58b）がいる。シェーシャ蛇の上にヴァジュラークシャ（ヴァラーハ）（59）がいる。人の上にヴァジュラムキー（59b）がいる。マカラの上にナーガヴァジュラ（水神）（60）がいる。マカラの上にヴァジュラマカラーがいる（60b）。鹿の上にヴァジュラーニラ（風神）（61）がいる。ヴェーガヴァジュリニー（61b）はヴァジュラーニラに似る。ゾンビの上のヴァジュラバイラヴァ（62）（クベーラ）がいる。ヴァジュラヴィクター（62b）はヴァジュラバイラヴァに似る。ネズミの上にヴァジュラヴィナーヤカ（ガネーシャ）（63）がいる。ネズミの上にプータナー（63b）がいる。

ビーマー（64）は緑色で、右手に金剛を左手に剣と盾を持つ。シュリー（吉祥天）（64b）は白色で、右手に金剛を左手に蓮華を持つ。サラスヴァティー（弁才天）（65）は白色で右手に金剛を左手にヴィーナーを持つ。ライオンの上にドゥルガー（65b）がいる。緑色で右の二手に金剛と円輪を、左の二手に武器（pattīśa）とホラ貝を持つ。（Bh, pp. 68-70）

（64）から（65b）までの四神はヒンドゥーの女神である。この訳では（64）と（64b）、（65）と（65b）が対として扱われているが、元来はそれぞれ部屋（宿）

(124) 『ニシュパンナヨーガーヴァリー』「悪趣清浄マンダラ」の問題点 (立 川)

が与えられるべきであろう。しかし、そのためには二部屋が不足である。すでに見たように、NPY 自体に (46~51) の六組を述べるテキストと (48~51) の四組を数えるテキストとが存すると述べられている。もしも四組であるならば、二組の諸尊が少なくなるゆえに、四人の女神たちにそれぞれ「部屋」が与えられることになる。

もっとも (43) から (51) までは九曜であり、その九尊から二尊を除くことは不自然ではある。しかし、『初会金剛頂経』「降三世品」の外縁には九曜の内の数尊が述べられるのみであって九尊がそろって述べられているわけではない。したがって、この場合も「部屋」の数を二十八にするために、(46~51) の六組ではなくて (48~51) の四組の諸尊を数える解釈が存在したと考えることも可能である。

「二十八の月輪を見るべきである云々」は反対論者の主張であると考え、外輪の五十五尊すべてが合体したかたち (ヤブユム) に表現されてはいないとも考えることも可能である。なおネワールの画家ガウタム・R・バジュラーチャリヤにとっては四女神が二部屋に入るのはそれほど不自然ではない、とのことであった。

4. 「清浄マンダラ」における「趣」

この内、ニーラカント等の神々の右手には可能な限り三鈷金剛があると知るべきである。

〔マンダラの〕西側のナーガヴァジュラ (60) の近くの蓮華の上にプリティヴィー (66) (地) がいる。黄金色で、両手に甘露と水瓶を持つ。さまざまな色の甲をつけ、剣を持ち、木綿の衣を着たアスラ (阿修羅) たちと、宝玉をつけた七つの首を広げ、妻を伴い、合掌した蛇 (ナーガ) たちもいる。

〔マンダラの〕円周 (チャクラヴァータ) の外側において、南東の方角に阿鼻等の地獄があり、南西には餓鬼道に墜ちたものたちがおり、北西には動物たちが、北東には人道にいる者たちが住む。この次第は他のタントラに述べられたあり方に従って書いた。

ある者は、ヴァジュラバイラヴァ (62) の近くにプリティヴィー (66) (大地)、ヤクシャたちがおり、ヴァジュラカーラ (58) の近くにアスラたちがいるなどと述べている。(Bh, p. 80)

地獄、餓鬼、動物、人の四道は南東等の中間方位に置かれ、アスラは北東からわずかに西側にいる。したがって、アスラは動物より地中にあると考えられている。しかし、最後の四女神がそれぞれの部屋を有し、二組の四尊 (46, 46b, 47, 47b) が削除されるようなことがあれば、マンダラを取り巻く五道のイメージは

『ニシュパンナヨーガーヴァリー』「悪趣清浄マンダラ」の問題点（立 川）（125）

大幅に変わってくる。

カトマンドゥ盆地のパタン市においてハカー・バハールやブ・バハールと並んで重要な仏教寺院にクワー・バハールがある。この寺院には櫓形の門があり、その門の天井に石製の悪趣清浄マンダラがはめこまれている。ここでは十六大菩薩が中尊，四仏および四妃をとりまいている。また，蓮華の花弁の輪と金剛環との間に七十九尊が輪状に配置されている。

クワー・バハールのこのマンダラは、『タントラ部集成』27番「一切智大日三十七尊マンダラ」と同種のものと思われ，そのテキストは『如来阿羅漢等正覺者の一切悪趣を浄める威光王の儀軌』（『東北目録』483番）[bSod nams rgya mtsho and Tachikawa 1989: 27]である。このマンダラの外輪に並ぶ諸尊には，十方天，八大龍王，諸惑星，二十八宿，四天王，九バイラヴァ，ヤクシャ，ヤクシニー，ラクシャサ，ヨーギニー，山の王，樹木の精などが含まれる [Tachikawa et al. 1991: 58]。これらの尊格は『完成せるヨーガの環』22章の「悪趣清浄マンダラ」の外輪に並ぶ諸尊はかなり異なる。

マンダラのなかに「趣」が描かれるのは NPY においてはこの悪趣清浄マンダラのみである。

頼富本宏氏（元種智院大学学長）には降三世マンダラの外金剛院の諸尊について貴重なご教示を得た。ここに記して感謝の意を表したい。

- 1) テキストはバッタチャルヤ版 (Benoytosh Bhattacharyya, ed., *Niṣpannayogāvalī of Mahāpanḍita Abhayākaraḡupta*, Gaekwad's Oriental Series, no.109, Baroda: Oriental Institute, 1972 [First published 1949]) を基本とし，リー版 (Lee, Yong-Hyun, ed., *The Niṣpannayogāvalī by Abhayākaraḡupta*, Seoul: Baegun Press, 2004) を参照した。現在，20 本以上のサンスクリット写本が残されている。本稿の写本略号は [森 1994] (注 2 参照) に従っている。本稿では，特にアーシャー・サフクティ（カトマンドゥ）所蔵 No.2-146 (C)，ネパール国立古文書館所蔵の No.3/687 (G) および No.1/1113 (E) (E と G は Bühnemann G. and Tachikawa Musashi, *Niṣpannayogāvalī, Two Sanskrit Manuscripts from Nepal*, Tokyo: The Centre for East Asian Cultural Studies, 1991 に所収)，同館所蔵の No.4/1029 (I)，Institute for Advanced Studies of World Religions [IASWR, 世界宗教高等研究所], New York) 所蔵の *Niṣpannayogāmbarasaptaviṃśatimaṇḍalasya samgraha* (T) [IASWR 1971: WSG-20] を参照した。他の写本に関しては [Bühnemann and Tachikawa 1991: xvii-xix] を参照されたい。
- 2) 森雅秀「『完成せるヨーガの環』第 1 章「文殊金剛マンダラ」訳およびテキスト」『高野山大学密教文化研究所紀要』第 7 号，1994 年，142-113，同「『完成せるヨーガの環』

(126) 『ニシュパンナヨーガーヴァリー』「悪趣清浄マンダラ」の問題点 (立 川)

第11章「ヴァジュラフーンカーラ・マンダラ」訳およびテキスト」高野山大学創立百十周年記念論文集編集委員会編『高野山大学論文集』高野山大学, 1996年, 101-124, 同「『完成せるヨーガの環』(Niṣpannayogāvalī) 第21章「法界語自在マンダラ」訳およびテキスト」『国立民族学博物館研究報告別冊』7, 1989年, 235-276がある。

NPYの他の章の和訳に関しては、拙訳「『完成せるヨーガの環』第二章訳注——『ペンディークラマ』(略次第)に述べられた阿閼マンダラ——」『愛知学院大学文学部紀要』35号, 2005年, 123-129, 第3-6章の訳として「『完成せるヨーガの環』研究(一)」『愛知学院大学文学部紀要』36号, 2006年, 129-144, 第7-10章の訳として「『完成せるヨーガの環』研究(二)」『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』22号, 2007年, 179-198, 第13-18章の訳として「『完成せるヨーガの環』研究(三)」『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』24号, 2009年, 117-143頁, 第19章の訳として「『完成せるヨーガの環』第十九章「金剛界のマンダラ」訳注」『密教図像』14号, 1995年, 1-33, 第21章諸尊図像に関して「『完成せるヨーガの環』研究(四)——第二十一章「法界マンダラ」諸尊図像——」『愛知学院大学文学部紀要』第39号, 2009年, 224-208, 第23章の訳として「『完成せるヨーガの環』二十三章和訳」真鍋俊照編著『密教美術と歴史文化』法蔵館, 2011年, 275-289, 第24章の訳として「『完成せるヨーガの環』第24章「五ダーカ・マンダラ」和訳」『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』佼成出版社, 2014年, 698-706を参照されたい。なおMadhavi Kolhatkar氏との共訳(英語)の出版を準備中である。

〈文献〉(文中と注に示したものを除く。)

bSod nams rgya mtsho, revised by Tachikawa, Musashi, Shunzo Onoda, Keiya Noguchi, and Kimiaki Tanaka. *The Ngor Mandalas of Tibet, Listings of the Mandala Deities*. Tokyo: The Centre for East Asian Cultural Studies, 1991.

bSod nams rgya mtsho and Musashi Tachikawa. *The Ngor Mandalas of Tibet*. Tokyo: The Centre for East Asian Cultural Studies, 1989.

〈キーワード〉 悪趣清浄マンダラ, 輪廻, 『ニシュパンナヨーガーヴァリー』

(国立民族学博物館名誉教授)